

布地を綾どる格子柄は世界各地に数々あれど、知名度と普及度でいえばタータンが一番であろう。そのタータンの由来を辿れば、16～17世紀頃スコットランドのハイランド地方で男性がスカートとして巻いていた毛織物に行き着く。だがその毛織物あるいは格子柄が、はじめからタータンと名付けられていたわけではなく、普及するにつれてタータンという呼び方になったようだ。

タータンの特徴を述べるとしたら、装飾パターン 17 分類における pmm で展開するパターンということになる（この 17 分類については『装飾パターンの法則』藤田伸、三元社を参照）。動きのない均質な線対称の格子柄なので、違いを出せるのは分割の幅や数そして配色しかない。そのため無限のバリエーションが存在して、無限の新規バリエーションが生み出される。

タータンのややこしいところは、氏族や地域やコミュニティがそれぞれに固有の格子柄を主張しているところだ。手元に『SCOTTISH CLAN AND FAMILY NAMES Their Arms, Origins, and Tartans』というスコットランドのいわば紳士録のような本があるが、掲載されているタータンを眺める限り、微妙に異なる配色と分割の格子柄が続くばかりである。とにもかくにも登録した者勝ちの状況といえなくもない。また企業もコーポレート・タータンを生産している。登録にあたっては格子柄を管理する協会がいくつか設立されたが、いずれも民間団体でバラバラに登録をおこなっていたため統廃合が繰り返され、2008年にスコットランド国立公文書館内にスコットランド・タータン登録所が設立され一元化をはかろうとしているようだ。いわゆる著作権とは異なることはたしかである。日本の百貨店などが新たに格子柄を作成した際、そのような機関に登録を済ませることで“タータン”と名乗れる。登録ビジネスとか権威付商法であることはあきらかだ。タータンは広く商業展開されており、それにとまって由緒由来など盛り込みトークが多く、個人的には気持ちが離れていく。

スコットランドといえば、バグパイプによる「スコットランド・ザ・ブレイブ」の行進が有名だが、その時の正装姿でみるキルトのタータンが美しい。紺のブレザーに色鮮やかなチェック柄が映えてスタンダード性も感じられる。かつて大英帝国が世界を支配した時代が長く続き、言語や技術をはじめ服装、スポーツに至るまで、さまざまな自国のスタイルを世界的スタンダードとして植え付けて今に残しているが、タータンもその延長にある。私たちが自国の歌のように馴染んでいる「蛍の光」「仰げば尊し」もスコットランド民謡だ。わが国とスコットランドは同じ島国同士、案外相性がよいのかもしれない。下にタータンの代表例として、ブランド・ビジネスで大成功したバーバリー・チェックを載せる。

